佳作

「思いやり」と「感謝」

神奈川県　立花学園高等学校一年　長本　翔生

学校終わりの下校中に起きた話です。

僕は電車通学なのでいつも通り電車で帰っていました。最寄り駅が近くなってきたので荷物を持って降りる準備をしていたところ、おばあさんが「財布落ちてるよ」と教えてくれました。ポケットから落ちていたことに気づかず、危うくそのまま降りてしまうところでした。「ありがとうございます」とお礼をし電車を降りました。

その財布で改札を無事に出ることができ、外国では財布を落としたら手元に戻ってこないのが当たり前なのに、日本はなんて良い国なんだと感動しました。

その直後、修理中のエレベーターの前で別のおばあさんが立ち止まっていて、両手が荷物でふさがっているようでした。困っていたので見ていると、階段の方へ歩いて行き一段一段ゆっくりと降りていたので、声をかけ荷物を持ちました。途中で休憩を挟みながらでしたが、僕のためになるべく早く降りようとしているのが伝わり優しい人だなと思いながら、階段を降り切ることが出来ました。

「ちょっと休憩してもいい？」と言い、駅前のベンチに腰をかけ、僕が荷物を渡すとその中から財布を取り出し、「少ないけど…」と小銭の中にあった銀色の硬貨を全て、計六百五十円をお礼としてくださったのです。

もちろん、最初は断わりましたが、それでも受け取ってほしいと念を押され受け取りました。

その後、軽くお話をして最後にその人は名が小泉さんということを教えてくださり、小泉さんがくれた六百五十円は僕のなかで他のお金よりも価値があり、とても心が温かくなりました。

その日、僕は三十分という時間の中で財布をなくすところだったのを助けてもらい、助けてもらった分、小泉さんを助けてお礼だけでいいのにお金をもらって、本来ならお金が全部なくなるところが逆に増えてしまった。

人を助けたり、恩を返したり、人のために行動することはお互いに良い気持ちになるし回りに回って自分へ返ってくると僕は思った。

僕も小泉さんに声をかける時にためらったように、例えば電車とか高齢者が立っていて席を譲る場面などためらったり、どうしようと思うだろうけど、勇気を出して声をかけてほしい、そうすれば絶対にいいことがある。

僕は助けたり行動をする思いやりと、自分がこれらをしてもらった時の感謝を大切にして生きていくことが重要だと思う。

「思いやり」「感謝」を自然に持って常に行動できている人が、ここぞという時に本性が出るから、自分が一番ではなく他の人を思う「思いやり」の精神、様々なことに対する感謝や関わる人への「感謝」の気持ちのある人になろう。

例えば、歴史的に見ても大震災の時についても、他の国は不安にかられ食料や水を早い者が取っていったり、取り合いになる。だが日本は食料、水の配給が来た時一列にならび皆が順番に生きられるか不安な中、自分が少しでも多く取りたいと取り合わない。

震災後の店員など来るはずのないコンビニに行列が出来ていた。他の国ならガラスは割れ商品は全て取られるだろう。

エルトゥールル号の時だって、自分達が死ぬかもしれないというなかで、トルコ人を助け実際に亡くなった日本人もいる。

つまり、このような生死が関わった不安の極致で本性が出る。震災の時お互いを「思いやる心」トルコ人を助けた「思いやり」それに対する「感謝」としてトルコから返ってきた。最初の財布が返ってくる話も同じだ。

日本はそういった面で優れていると思う。だが、特別扱いするのも違うと思う。何が言いたいのかというと、国や文化などが違えど「思いやり」「感謝」は誰にでもあるものだ。

ふと、感じた時に日々のストレスを忘れ、繋がりを感じてほしい。